

介護等の体験の意義に関する一考察 ーある特別支援学校(知的障害)における指導実践を通してー

金丸 実奈 江*

I. はじめに

近年、教育の質的向上を目指し、学習指導要領の改訂と共に、教職を目指す学生や教職に携わっている教員の資質を向上させるための様々な施策が行われている。義務教育の教員免許状の取得条件として、平成10年より介護等の体験を行うことが小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に関わる教育職員免許法の特例等に関する法律に明示された。この法律の目的は、「個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深めること」「人の心の痛みがわかる人づくり、各人の価値観の相違を認められる心を持った人づくりの実現」といった趣旨に基づくものである。古屋(2013)の教育実習再考研究の中で、大学の授業を受ける際にも、特別支援学校において介護等の体験を行ったり、学生ボランティアに参加して障害のある子どもと接する経験をもっていることは、大学の授業で学ぶための素地になり、特別支援教育の基本的な内容を学習する効果がより高まると述べている。このように、介護等の体験が、学生や指導教諭にどのような効果をもたらしているのかを検討し、その位置づけを再認識することで、資質向上への段階的なつながりがさらに明確になるのではないかと考えている。

本論では、知的障害者を教育する特別支援学校(以下、A特別支援学校)での介護等の体験に着目し、それを行った学生の感想から、学生と特別支援学校の教諭への効果について整理していくことを目的とする。

II. 方法

1. A特別支援学校で実施している介護等の体験について

特別支援学校における介護等の体験の具体的な内容は、小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に関わる教育職員免許法の特例等に関する法律施行規則(以下省令と表記)によると、

「障害者、高齢者等に対する介護、介助、これらの者との交流等の体験(介護等の体験)」

* 山梨県立ろう学校

とは、介護、介助のほか、障害者等の話相手、散歩の付添いなどの交流等の体験、あるいは掃除や洗濯といった、障害者等と直接接するわけではないが、受入施設の職員に必要とされる業務の補助など、介護等の体験を行う者の知識・技能の程度、受入施設の種類、業務の内容、業務の状況等に応じ、幅広い体験が想定されることと述べられている。

この省令に従って、A特別支援学校が学生に提供する体験の機会は、日常生活の指導や生活単元学習などを中心とする授業である。学生の役割は、学級担任(学生指導役の教諭を意味し、以下学級担任と表記)の教育活動をサポートすることが主で、子どもへの直接的な支援や間接的な支援、また、観察という方法で行われている。

事前のガイダンスでは、特別支援学校の介護等の体験を統括する教諭がパソコンのプレゼンテーションソフトを使いながら講義をして、詳細な説明を行っている。

体験中に学級担任が行うことは、以下の2点である。第一に、まず子どもの気持ちを解説したり、次の授業の準備や意味を具体的に知らせるようにし、子ども理解や授業理解を促せるようにする。第二に、学生との意見交換において、子ども理解の他に授業に至るまでの経過や、教師の仕事や特別支援教育に関することについて大学の授業と結び付けながら理解できるように説明をすることである。配慮点は、学校現場での初めての体験であり、専門用語は説明を加えわかりやすく話すこと、指示などはその意図を知らせながら行うこと、教育実習に向けての前段階として、経験や理解をより深められるように段階的な指導を行うことが求められている。

2. 手続き

介護等の体験を経験した学生の書いた感想文(平成24～25年度)より、「特別支援教育」「授業づくり」「関わり・支援」「社会性・教師・仕事」の4つのカテゴリーに沿って、筆者が感想の一部をメモした。そのメモを元に、介護等の体験が学生にもたらす効果と特別支援学校の教諭に求められることを整理した。

Ⅲ. 結果

メモの内容を以下に示す。

特別支援教育

- ・母が特別支援学校の教員をしています。この実習をする前に母に様子を聞いて、心構えを作ってきました。実習がとても楽しみでしたし、実際に来てみて子どもたちが純粋でとてもかわいくて、別れるのが辛かったです。
- ・中学校時代に休み時間に特別支援学級に遊びに行っていました。障害のある友達と関わっていたので、実習もとても自然に体験することができました。これからもボランティアなどで関わっていきたいと思いました。
- ・よく耳にする障害の名前が実際にどのようなことなのかよくわかりませんでしたが、子

もたちと接すると普通と何ら変わりのないみんな優しい良い子でした。こんな世界もあるんだと感動しました。

感想に関する小考察

過去に特別支援教育や障害のある子どもたちに接するなどの経験がある学生はとてもスムーズに体験をすることができているようである。また、今回の体験が、特別な配慮は必要であるが、とても身近で親しみのある教育であると感想をもつ学生がとても多かった。特別支援教育への理解を深め、今後の教育実習や教師になってからの生活につながる貴重な体験になっているのではないかと考える。

授業づくり

- ・教材・教具を活用した授業やストーリーをもたせた授業展開などに驚きました。
 - ・なぜ、〇〇さんの授業では、〇〇の様なことをしているのですか。その目的がわからなかったです。
 - ・環境的にわかりやすくシートの色や材質を変えたり、手順表を用いてわかりやすく示したりしていることがよかったです。
 - ・発言をたくさんさせようと様々な工夫を凝らして挙手をさせていた。あんなに意見がたくさん言えるなんて驚きました。
 - ・教師と一緒に動いて動きを作っていることで子どもたちが楽しそうに一緒に行動していた。授業の雰囲気づくりが上手で一緒に楽しんで活動できました。
 - ・一人一人がみんな違った実態であることで、先生方も授業をしていく時にとても大変だと思いました。しかし、一緒に楽しそうに学習に取り組めていて充実していたと思います。
 - ・一人がどこかに行ってしまうと、とても心配しました。しかし、友達が「〇〇に居るんだと思う」といって一番に探しに行くと直ぐに見つけることができ本当によかったし、友達思いだなと思いました。
-

感想に関する小考察

わかりやすく工夫された授業に関心をもって観察しているという感想が多かった。小・中学校では、教科書があってその計画にそって授業が行われているが、特別支援学校(知的障害)の場合、教科書をもたない独自のカリキュラムをもとに、生活に根ざした授業づくりを心がけている点に興味や関心を覚えているのではないかと考えられた。

関わり・支援

(直接支援の効果)

- ・子どもに直接言葉かけをしたら、直ぐに〇〇の行動で応えてくれたことがうれしかった。
- ・手を差し出すと、つないでうれしそうに歩き、体育館まで移動できた。
- ・挨拶をすると、直ぐに笑顔で応えてくれた。そして、次の〇〇の授業でも直ぐに話を聞いてくれた。

(行動のとらえ方)

- ・行動で気持ちを表すと聞いていたので、名前を呼ぶと必ずジャージのファスナーを上げる。何度呼んでも同じ行動をするので、その行動が返事であると受け止められ、理解できた。

- ・一緒に体育館に移動しようとしたら、一人でグラウンドに走って行ってしまった。あの時〇〇さんがどんな考えや気持ちで行動していたのだろうか。

（言葉のない子どもとの関わり）

- ・言葉がないので、どのくらいわかっているのかわからなかった。言葉がなくても先生の言葉を理解していると聞き、驚いた。
- ・掃除に行かなければいけないので、言葉で伝えると、水道で水を出してうれしそうにしていた。何度も話しかけたが同じ行動を繰り返した。そこで、掃除場所に自分が行ったら、一緒に付いてきてくれた。言葉より行動で示すことが効果的だった。

（支援の程度）

- ・帰りの支度で、カバンに連絡袋を入れることをしてあげようとした。友達が「それは自分でやることだよ。」と知らせてくれた。どこまで手伝ってあげたらいいのかわからないと思った。
- ・着替えの時に、ボタンをしていなかったの、ボタンをしてあげようとしたが嫌がってしまった。しなくてもいいのか？判断できなかった。

（関わりの方法）

- ・子どもたちとはやく仲よくなるためには、友達同士のような感覚で接することが必要だと思って、そんな関わりを心がけたら、先生から注意されました。では、先生として関わるとはどうすればよいのか、それで子どもと仲よくなれるのか二日間悩みました。
- ・子どもたちを〇〇ちゃんと呼んでいました。先生方は、〇〇さん〇〇くんと呼ぶように、生活年齢を意識して関わるようにと話されました。つい大学での友達同士の感覚になってしまい、反省しました。

（言葉以外の関わりの方法）

- ・一生懸命言葉で次のことを伝えようと何度も何度も言いました。しかし、先生がきたら、何にも言わないのにしっかり行動ができていました。どうして伝わったのだろうと思いました。
- ・先生が〇〇と言ったら〇〇くんは違うことをしました。先生は△△と言ったら正しいことをしました。意味は同じだと思ったが、子どもたちに伝わりやすい言葉ってあるんだとわかりました。
- ・〇〇くんが行動している様子を先生が言葉で解説してくれました。なるほどと思いました。そこで、同じように先生と同じように行動したら〇〇くんに気持ちが伝わったと思いました。うれしかったです。

（反応の喜び・感動）

- ・二日目に朝来たら、〇〇先生と名前を覚えてくれて呼んでくれました。とってもうれしかったです。
- ・一緒に掃除をしたら、僕の掃除道具も片付けてくれました。とても親切で暖かい気持ちになりました。

（支援者の考え方や気持ち）

- ・叱ると益々いけない行動になりやすい。叱る場面でも気持ちを抑えて表情を変えないでいると正しい行動をするようになると聞いた。先生方が誉めたり叱ったり認めたりすることも子どもに合わせて使い分けているのだと知りました。
- ・先生に支援学校で教えていてどんなことを心がけていますか？とお聞きしたら、子どもの行動や気持ちを的確にとらえようといつも考え接していることだとお返事されました。子どもの行動を考える際に気持ちを想像することは今までは目の前の現象だけに対応することばかりしていましたが、とても奥深い教育だと思いました。
- ・子どもたちをよく誉めていました。認められたり誉められたりすることは子どもたちはとてもうれしいと思います。そして、次もがんばろうと思うと思います。これから教師になっても心がけていきたいと思います。

感想に関する小考察

子どもの実態をとらえながら適切な支援を判断して行うことは介護等の体験の二日間では難しい。しかし、教師の関わり方を見て子どもの気持ちを理解することなどの実態把握の様々な方法を体験することができたのではないか。また、関わりについては、言葉を使わない関わり方について考えたという感想がみられた。関わる方法が数多くあることを知るきっかけにつながった。

社会性・教師・仕事

- ・自分から挨拶したり、積極的に友達を手伝ってみんなで行動しようしたり、先生からの約束をしっかり守ろうとして、僕たちよりずっと立派だなと思いました。見習いたいです。
 - ・いけない行動をどのように注意したらいいのか、どこまでがいけないのか判断ができませんでした。自分も社会人になるのに、その点の判断がきちんとできないといけないと思いました。また、子どもを叱るとき、どのようにして接して知らせたらいいのか迷いました。
 - ・一日中立ち続け、動き続ける仕事で先生方は本当に大変だと思いました。子どもたちがとても純粋でかわいくて先生の言うことをよく聞いて行動していて子ども達の元気にパワーのもらえる仕事だと思いました。
-

感想に関する小考察

どの教育現場でも子どもたちに生活のルールや価値観を理解させ、社会人になるための資質を育てていくことはとても大切である。学校生活全般にわたって、教師自身が社会人として必要な資質を身に付け、見本となって行動を示していくことが求められていることを学生も実感できていた。また、教師は個々の子どもの実態によりそい、見守り、導き、助けていくために様々な方法で取り組んでいることも実感することができたのではないかな。

IV. 考察

1. 介護等の体験が学生にもたらす効果

介護等の体験が学生にもたらす効果について、学生の感想をふくめて5点に整理して述べる。

(1) 大学で学んだ内容を具現化して体験する学び

大学で学んだ子どもの行動のとらえ方や関わりの方などを、実践してみようと試みている学生もいる。一人一人の実態が様々であることやそのための授業づくりについて、難しさを感じたという感想がよせられている。実際の現場で体験することによって得られた実感のようである。大学での学びを再考しようとする様子が伺えた。

(2) 様々な子どもの理解とかかわり方の違いの理解

子どもと接することで、具体的にどんな子どもであるのかという探求をしようと努力している様子が見られた。例えば、「自分(子ども)は言葉が話せないのに、先生の指示する言葉はとてもよくわかって行動できていた。」や「体育館に行こうとしたら一人で別のところへ行ってしまうて困った。」など、子どもたちの気持ちの移り変わりを推測し、教師のアドバイスをもらいながら実態把握に努めていた。また、「同じ言葉で伝えても、担任の教師の言葉であれば直ぐに行動できて、自分だったら行動できなかった。」などの接し方の違いや、関係作りにも難しさがあることが理解できていた。

(3) 教育現場での教師としての自覚や使命、責任

「いけない行動をどのように注意したらいいのか、どこまでがいけないのか判断ができなかった。」や「子どもに合わせて、教師が誉めたり、怒ったり、認めたりすることで行動が改善されることを知った。」と感想を述べている。また、子どもとの距離感を縮めるために、友達同士の感覚で接することを試みたが、自分の立場を学級担任に促され反省をしている。教師の立場にいずれなろうとしている自分を省察し、自覚や使命、責任を実感するきっかけになっていた。

(4) わかりやすく工夫された授業の展開

「教材・教具を活用している。」「手順表を用いてわかりやすく見通しをもたせている。」「教師と一緒に動いて動きを示している。」など特別支援学校(知的障害)特有の授業づくりの在り方を体験する機会になった。教科書を用いない実際の授業に戸惑いを隠せない様子であったが、生活に根ざした体験的な学習についての驚きや感動を覚え、授業づくりの目的をとらえるきっかけにしている。

(5) 特別支援教育への理解

中学時代に特別支援学級に遊びに行く経験があった学生は、「自然に体験することができた。」と受け止めている。また、障害の名前について「よく耳にしていたが、実際にどのような障害なのか分からなかった。子どもたちと接して普通となんら変わらない事を知りました。」という感想をもっている。障害(ハンディキャップ)のイメージではなく、明るく純粋な子どものたちとの和やかな教育の場であることの実感をもちやすくなっていることがわかる。

2. 特別支援学校の教諭にもたらす効果

介護等の体験を実施する特別支援学校の教諭にもたらす効果について、介護等の体験の実施までの経過や学生の感想から6点に整理して述べる。

(1) 学生が教師という立場やイメージを身をもって納得する機会を味わえるような配慮

介護等の体験は教育実習の前に行う体験活動の一つである。学生は、教師として現場に入るとはどのようなことなのかというイメージを創り上げながら体験をしている。学級担任に「子どもたちを教えていて心がけていることは。」という質問を投げかけた学生がいた。学生は、その返答が自分の考えと違っていたことを実感していた。教師という立場や存在を学生自身が現実感をもってとらえられるよう、自己評価をさせながら、子どもとの豊かな関わりの場を提供していくことが必要である。

(2) 支援の方策を学生に伝授する工夫

学生は子どもたちにとって先生であり、様々なことを教えてくれるよき理解者と受け止められている。「自分の名前に先生を付けて呼んでもらってうれしかった。」と感想を述べている学生もいた。また、教師と同じ言葉をかけたら、子どもに伝わったことを喜んでいる学生もいた。学級担任は、子どもたちがどのように学生達に接しているのかをよく観察して、学生と子どもたちとのよりよい関係作りを思案し、支援の方策を学生に伝授していくことが求められている。

(3) 子どもと学生との関わりに新たな視点をもたらす機会

学級担任は、子どもの一番の理解者である。学校での子どもたちの様子は把握している。しかし、学級担任が知らない子どもたちの実態も必ずあるだろう。初めて会う学生と子どもたちが接する様子は、子どもたちの新たな実態を提供することもある。学級担任と学生との情報交換会では、学生の感想や質問を聴くことで、子ども理解を広げる新たな視点が得られるのではないか。

(4) 常によりよい教育のできる環境や場面である柔軟な思考

毎日の授業は思案を重ねて、実践している。その授業の目的や内容を知らせながら、子どもたちが主体的に授業に参加している様子を知らせていくことができるように努めた。また、その授業に学生がスムーズに入っていくことができるように柔軟な対応を検討していくことが求められる。

(5) 介護等の体験から教育実習へとつなげる段階的な指導の見通し

教育実習生に求めるようなことを介護等の体験の学生に求めてもなかなか端的にその応えは返ってこない。教育実習というステップに向けて、介護等の体験の際に理解を深め、充実した体験を行うことができるように段階的な指導の見通しを特別支援学校の教諭たちはもっておくことが必要である。子どもの観察や授業づくりについてなどの視点を具体的に示し、より実感を伴うように説明を加えていくことが求められるのではないだろうか。

(6) 効果的な指導のためのマニュアル(試案)と指導のフィードバック

介護等の体験の指導効果を高めるためには、指導の目的や学生への具体的な対応などの一貫した流れを共有できるマニュアル(試案)が必要なのではないかと考えた。このマニュアル(これについては別稿で紹介, 検討したい)の内容は、介護等の体験に至るまでの様々な手続きや体験期間の具体的な流れ、学生への対応 Q & A、校内や大学との連絡調整などである。担当教諭内で介護等の体験の内容を共有することで、学級担任との連携をスムーズにし、学生への指導内容も整理されていくのではないかと考えている。今後の活用を期待する。

また、指導のフィードバックを目的に、介護等の体験を終えた学生の感想文を校内回覧し、周知できるようにしている。学生の感想から、学級担任が学ぶことも多くあり、次期の体験へ向けて一考する機会となっている。

3. 総合考察

介護等の体験について、学生への効果や受け入れ側である特別支援学校の教諭に求められることについて整理した。学生たちも特別支援学校の子どもたちに接する経験から、教育への戸惑いが少しずつ解消され、次の教育実習や教師を目指す心構えへの育ちにつながることができていると考えられる。

小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に関わる教育職員免許法の特例等に関する法律等の施行についての通達(1997)によると、介護等の体験は「個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深めること」「人の心の痛みがわかる人づくり、各人の価値観の相違を認められる心を持った人づくりの実現」の目的に基づいていると述べられている。この目的のもとに、介護等の体験で学んだことが、学生にとっては、実際の大学での学びの深化につながり、実感を伴う効果的な経験の場になっていると考えられる。また、特別支援学校においても、教育実習の前段階の指導の在り方で大切なことが見えはじめている。今後も、学生のニーズを把握しながら、介護等の体験の機会の検討を重ね、特別支援学校において、より一貫した指導の定着化が図られていくであろうと感じている。

IV. まとめと今後の展望

特別支援学校には、小学部・中学部・高等部とあり、3つの学校が一つになった様な学校であると学生に伝えている。介護等の体験が終わる最終日には、反省会の中で各学部間の体験を共有できるように意見交換の時間を設定している。自分とは違った学部での体験の様子について意見を交わすことで、新たな世界を知ることができるであろうと考えている。

今後も、特別支援学校の教諭も学生も相互にこの介護等の体験の意義を明確にとらえ、

充実した機会となっていくことを願っている。

文献

- 1) 古屋義博 (2014) 教育実習再考－教育実習を経て変化する学生の「教師に求められる力量」像の検討－. 山梨障害児教育研究紀要, 8, 63-74.

謝辞；本論を作成するにあたり，山梨大学障害児教育講座の鳥海順子先生，古屋義博先生にご指導をいただきました。心より感謝申し上げます。